

# お姉さまは 魔法少女



PARALLEL ACT



# お姉さまは魔法少女

## もくじ

紅薔薇の花びらが舞い落ちた時 . . . . .	7
静かに魔法は消える . . . . .	27
あとがき . . . . .	42

イラスト／ロンゲ魔神K

お姉さまは魔法少女

「ごきげんよう」

「ごきげんよう」

さわやかな朝の挨拶が、澄みきつた青空にこだまする。

マリア様のお庭に集う乙女たちが、今日も天使のような無垢な笑顔で、背の高い門をくぐり抜けていく。

汚れを知らない心身を包むのは、深い色の制服。

スカートのプリーツは乱さないように、白いセーラーカラーは翻らせないように、ゆっくり歩くのがここでのたしなみ。もちろん、遅刻ギリギリで走り去るなどといった、はしたない生徒など存在してはいようはずもない。

私立リリアン女学園。

明治三十四年創立のこの学校は、もとは華族の令嬢のためにつくられたという、伝統あるカトリック系お嬢さま学校である。

東京都下。武蔵野の面影を未だに残している緑の多いこの地区で、神に見守られ、幼稚舎から大学までの一貫教育が受けられる乙女の園。

時代は移り変わり、元号が明治から三回も改まった平成の今日でさえ、十八年通い続ければ温室育ちの純粹培養お嬢さまが箱入りで出荷される、という仕組みが未だに残っ

ている貴重な学園である。

狸顔の祐麒が本当の狸になって帰ってきてから、祐巳の生活は一変してしまった。変身魔法少女なんて、アニメや漫画の中だと思ってた。これで地味キャラ返上ね。

そして、中の人がこんなに大変だったなんて。魔法少女って、もっと可憐に町の人を幸せにしたり、敵を倒したりするものじゃなかったの？ 泥まみれになったり、触手で飛ばされたり。これじゃあまるで、十八…… げふげふ。

そんなこんなで、魔法少女りりかるユーミ、始まりません。今度はタイトル違います。

## 紅薔薇の花びらが舞い落ちた時

1

清々しい朝。雲一つ無い、いわゆる快晴。一人の少女が  
マリア様の前でお祈りをしている。

祐巳はそのまま声をかけようと思ったが、長くなりそう  
なので、逸る<sup>はや</sup>気持ちを押さえてマリア様へのお祈りを優先  
した。その娘が先に去らないように、簡単に済ます。

「ごきげんよう、瞳子ちゃん。もう退院したんだ」

「ひっ!!」

瞳子ちゃんは、声をかけたのが祐巳だと気づくと、脱兎<sup>だつと</sup>  
のごとく逃げ出した。

「あっ! 待って!」

祐巳は瞳子ちゃんを追いかけながら、逃げられる理由を  
考えた。

やっぱり、ユーミとして瞳子ちゃんを病院送りにした事  
だろうか? でもそれは、ユーミがした事であって、祐巳

がやった事とは認識されてない筈である。顔は隠してない  
けれど、何故かバレない。

「ねえ、瞳子ちゃんつたら!」

「うわああん」

「え?」

祐巳が瞳子ちゃんの腕を掴んで歩くのを止めると、瞳子  
ちゃんは祐巳の胸元に飛込んで大泣きし始めた。

「ごめんなさい。私、祐巳さまに酷い事して……」

「ああ、そうか」

瞳子ちゃんが完全にスレーブになったのは、桂さんと戦っ  
ている間だから、記憶が残っているのは、祐巳に攻撃を仕  
掛けていたまでだったんだ。

「怪我はないですか? 火傷とか?」

「大丈夫だよ。なんともない。それに……」

「こんな物があるからいけないんです!」

「あっ! 瞳子ちゃん何するの!?!」

瞳子ちゃんは靴からソーイングセットのハサミを取り出  
すと、それを自分の髪に当て、縦ロールを切るうとした。

祐巳は慌てて止めに入る。

「邪魔しないでください! これが祐巳さまを傷付けたん  
です!」

「そんな! あ痛っ!!」

「あっ！」

髪を切らせまいと揉み合っていると、ハサミの刃が祐巳の指を切ってしまう。傷口から血がポタリと落ちる。

「ごめんなさい……私、また……」

「大丈夫だよ。これくらい、嘗めときゃ治るから」

そう言っ、祐巳は怪我した指を口に含んだ。

「そんなんじゃ駄目です。破傷風にでもなったらどうするんですか？」

そう言っ、瞳子ちゃんはハンカチを取り出すと、祐巳の指に巻いた。その白くてレースの入ったハンカチは見覚えがある。

「瞳子ちゃん、これ、祥子さまの」

「以前プレゼントして頂いた物ですけど、かまいません」

「そんな、駄目だよ」

「お詫びです。祐巳さまは、大切な方ですから」

「瞳子ちゃん……」

祐巳は、瞳子ちゃんをギュッと抱きしめた。

「な!? 何をするんですか!」

「ありがとう。私のために」

「そんな……」

祐巳の肩口が段々と湿っていく。

「泣かないで、瞳子ちゃん。ほら、マシユマロあげるから」

そう言っ、祐巳は鞆からマシユマロの入った袋を取り出した。

「……祐巳さま、やっぱり怒ってらっしゃいます?」

「そんな事ないよ」

（だっ、お礼はもうしたし。ちょっと、やり過ぎちゃったけど）

始業の予鈴が鳴ったので、二人はそれぞれの教室に向かった。そして昼休みに、一緒にお弁当を食べる。瞳子ちゃんと二人だけでお弁当を食べたのは初めてかも。

「ところで祐巳さま。私はどうして入院したのでしょうか?」

「それは、大怪我したからじゃないの?」

「だから、どうして怪我したのかが分からないんです。気が付いたら病院のベッドの上でしたから」

「あ、そっか」

さて、どう話してよいものやら。

「えつとねえ」

と言っ、祐巳は頬をポリポリとかいた。

「エイリアン対策係が現れて、ドリルで瞳子ちゃんの肩を貫いて、その後現れた魔法少女が止めを刺したの」

「……………」

祐巳は事のあらましを完結に、そして直球に話した。暫く重い空気が漂う。

「ああ！」

瞳子ちゃんが両手で顔を覆って泣き出した。

「ごめんなさい。私は祐巳さまの頭を攻撃していたのですね！」

「え」と

「祐巳さま、ご安心下さい。祖父に訊けば、良いお医者様を紹介してくださると思います」

「あの〜」

今度は祐巳が入院させられそうだった。

2

「ただいま」

乃梨子は、自分の部屋に帰ると制服を脱ぐ。リリアンに通つて半年経つので大分慣れたが、セーラー服のワンピースはやっぱり脱ぎにくい。制服をハンガーにかけ、スリッパ姿のまま椅子に座り、端末に声をかける。

『ハロー、NAVI。ログ、イン、乃梨子』

「乃梨子宛てにメールが届いています」

端末がメールの着信を告げる。届いているメールはタク

ヤ君や友人からの物だった。一通り目を通す。その最中に部屋のドアが開いて、瞳子さんが顔を出す。

「リコ、帰つてたの？」

「あ、うん。ただいま」

「相変わらず凄い格好でパソコン使ってるね」

「だって下着の方が静電気出ないからね。それに暑いし格好だけで言うなら、瞳子さんも良く下着姿でうろついている。それに乃梨子が使っている物は「パソコン」と言う代物ではない。」

「確かに暑いけどね。ドア開けただけで熱気が漂ってくるよ」

「それでもエアコンは全開にしてるんだけどね」

「先月の電気代凄かったんだからね」

「ちゃんと電気代は払ってるでしょ？」

「だから余り言わないけどね。程ほどにしとけよ」

「はい」

そう言つて瞳子さんはドアを閉めた。電気によるエアコンは全開にしている。瞳子さんには秘密にしているが、ガスエアコンも導入して冷やしている。そこまでの冷却が必要なのは、部屋の壁が見えなくなるくらい構築されたNAVIの冷却のためだった。瞳子さんがガス代まで気にしないのは、乃梨子が密かに購入した階下の部屋の物を使つて

いるからだった。

階下の部屋には、乃梨子の部屋だけに収まりきれなかったNAVIや、大容量UPS、ガス発電システム、冷却機構が構築されている。電気だけでなくガスも使用しているのは、突然の停電に対応するためである。都市ガスだけでなく、予備としてガスボンベも何本か待機している。

これだけの機材と維持費を賄う資金は、乃梨子がワイヤードの情報を使用し、株や為替、貴金属等の金融取引で得た財である。

「さて、そろそろ本気でいきましょうか」

そう言って、乃梨子は全感覚をNAVIに接続する。瞬時に東京中の情報が乃梨子の手の内となる。直感を第六感とするならば、ワイヤードの感覚は第七感と言うべきものだった。

（祐巳さま、いやユーミがあればやるとは計算外だったわ）

今まで幾度と無くユーミにスレーブを当ててきたが、成績は正直芳しくない。

「そろそろ、何とかしないとやばいわね」

ユーミを確実に倒すには何が一番効果があるかを考える。

「やはり、あの人を使うしかないか」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「ただいま」

お手伝いさんに見送られながら、祥子は自分の部屋に戻った。鞆を机の上に置いて一息吐く。いつもなら最初に制服を着替えるところだが、その日は妙な胸騒ぎがして、最初に行ったのは机の引き出しを開ける事だった。

「な、何なのよこれはっ!？」

祥子は絶叫するが、広い屋敷が幸いして、誰かに聞かれることはなかった。

翌朝、祥子は臃な様子でマリア様へ続く道を歩く。

「あ、お姉さま、ごきげんよう」

「……」

「？ お姉さま？」

「ああ、祐巳。ごきげんよ……」

祥子は祐巳に二度呼ばれてようやく返事ができた。だが、祐巳の顔を見ると固まった。

トクン、トクン、ドクン。

祥子の胸の鼓動が速くなる。祥子は段々と視線を下に逸

らしていった。目から唇、次に首筋、そして胸元に向かう。祐巳の制服が段々と透き通ってきて、可愛らしい下着が見えてくる。簡単なレースと、ピンクのリボンが付いた白いう下着。次第にそれすらも透けてきて、祥子の目の前には全裸の祐巳がいた。

祥子は息も荒らくなり、無意識の内に腕が祐巳に向かって伸びていく。

「……さま、お姉さま。お姉さま!」

気が付くと、祐巳が自分を呼びながら身体を揺さぶっていた。当然祐巳は制服を着ている。

「私、は……?」

「お姉さま、どうされたんですか? お気分がすぐれないんですか?」

祐巳が心配そうに祥子を見上げている。祥子の視界に自分の全裸体が現れていたなどと、想像すらしていない純真な目をしていた。その目を見ていると、祥子は罪悪感に襲われる。

「なんでもないのでよ。さあ、マリア様にお祈りしましょう!」  
祥子のお祈りの時間は普段よりも長かった。教室に向かう途中、祥子はポケットを押さえる。そこには 昨日机の中に入っていた 祐巳の着替えや裸の写真が仕舞<sup>しま</sup>って

あった。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「……」

「お嬢様? また何かあったのかしら?」

祥子は帰宅すると、無言で部屋に向かう。普段は挨拶を返す祥子だが、お手伝いさんの声も耳に入らない。しかし、お手伝いさんからは、いつもの癩癩<sup>かんしゃく</sup>と思われ、余り気に止められなかった。

祥子は部屋に入ると、乱暴にドアを閉め、さらに鍵を掛けた。鞆を床に落とすと、ずかずかと歩いて行き、ベッドに突っ伏した。

「祐巳……」

自分の妹の名前を呟くと、ポケットから祐巳の写真を取り出した。祐巳の裸体を目に焼き付けた後、瞼<sup>まぶた</sup>を閉じる。

《お姉さま♡》

可愛い妹の声が響く。ころころとした可愛い笑顔が眼前に浮かぶ。

「ああ、祐巳……」

祥子はゆっくりとベッドから起き上がると、椅子に座り、引き出しを開ける。そこには、今年のクリスマス、祐巳が

ら貰った黒いリボンが入っていた。祥子は、そのリボンを手にとると、鼻に当てて深々と息を吸い込む。

(祐巳の匂い……)

何カ月も経っているリボンに、匂いが残っている筈はない。しかし、祥子には確かに祐巳の匂いが感じられた。匂いと共に祐巳の声が再び脳内に響いてくる。

《お姉さま…… お姉さま……》

祥子は自分に近寄ってきた祐巳を抱きしめる。二人は裸、間に分かつ物は何も無い。温かい祐巳の体温と、柔らかく滑らかな肌を感じる。二人は目を瞑り、ゆっくりと唇を近づける。

「はい、そこまで」

祥子の視界が暗転する。同時に、聴覚と嗅覚も閉ざされる。火照っていた身体が急激に冷めてくる。

ゆっくりとベッドの方を見遣ると、そこには乃梨子ちゃんがあぐらをかいて座っていた。そして、にたにたと笑いながら語りかけてくる。

「ねえ、知ってる？ 小笠原祥子が誰を好きかって。誰のことを想って嫌らしいことをしてるかって」

祥子の、全身の血液が下がってくる。汗がじっとりともわりつく。身体は硬直していたが、辛うじて右手を引き

上げ、たくし上げられていたスカートを整えた。

「の、乃梨子ちゃん。あなた、いつから、そこに居たの……？」

祥子は、渾身の力を振り絞って声を出した。

「最初っから居ましたよ。ほら」

そう言っただけで近づいてきた乃梨子ちゃんは、一枚の写真を祥子の前にちらつかせた。

「!？」

そこには、丁度今、祥子が行っていた行動が写っていた。祥子が写真を見て驚愕していると、机の上に置いてある液晶ディスプレイが、手も触れていないのに勝手に点いた。そこから、先ほどの行為が動画で、しかも「祐巳、祐巳」と喘ぐ声も一緒に映し出された。

「この写真と映像を、一番見られたくないのは誰でしょうねえ？ 祥子さまのお父様？ それとも祐巳さま？」

「乃梨子ちゃん、あなた……」

「祐巳さまが知ったらなんて思うでしょう？ 憧れのお姉さまが自分を……」

「止めて!!」

祥子は乃梨子ちゃんにすがり付いて懇願した。

「それだけは、祐巳にだけは言わないで……」

乃梨子ちゃんがニヤリと笑って答える。

「良いですよ。でもその為には条件があります」

「取引というわけね。何？ お金？」

「そんな無粋な物ではないですよ。祥子さまに魔法少女になってもらい、同じく魔法少女のユーミと言う人物を倒して欲しいだけです」

「魔法少女？ 乃梨子ちゃん、あなた何を言って……」

「信じられないのも無理はありません。でも、言う通りに動いてくれればそれで良いんです」

そう言われても、魔法なんて非科学的なこと信じると言う方が無理だ。でも、もし魔法があるのなら、万全のセキユリティシステムがある小笠原邸に乃梨子ちゃんが居る事の説明もつく。

「あ、私がここに居ることは魔法じゃありませんから」  
「え？」

まるで心を覗き見られている様に的確な科白だった。

「勿論無料とは言いません。まず、前払いとして、祐巳さまの声と匂い」

「え!？」

「先ほどはお楽しみでしたでしょうか？ 祐巳さまの声と匂いを、少し精神に流し込んで差し上げました」

「な……!？」

祥子の拳が震える。

「そして、メインディッシュは祐巳さま」

「何ですって!？」

「祐巳さまを、祥子さまの自由になるようにして差し上げます」

「何を言うの！ 祐巳は『物』じゃないわ！ それにそんなもので私が…… ヒッ!？」

祥子の身体がビクツと痙攣する。

「これだけ濡らしておきながら、祐巳さまが欲しくないなんて言わせませんよ」

「や、止めて、乃梨子ちゃん……」

乃梨子ちゃんは止めない。祥子の身体が小刻みに震える。

乃梨子ちゃんが祥子の耳元に口を寄せ、囁く。

《お姉さま♡》

「ああ……」

祥子の耳元には祐巳の声で届いた。その瞬間、祥子の身体が大きく震えた。

「身体は正直ですね」

「……」

今度は乃梨子ちゃんの声で届いた。祥子は反論することができず、悔し涙を流しながら唇を噛む。

「それでは、契約成立と言うことで。詳しいことはまた後日」

そう言うと、乃梨子ちゃんの姿が部屋から消えた。時計

の音だけが部屋に響く。

「祐巳……」

祥子の眼から、涙が溢れた。

(マリア様、私は昨日乃梨子ちゃんに脅されました。いえ、乃梨子ちゃんを責めるつもりはございません。これも私が祐巳のことを…… 祐巳をいかがわしい目で見てしまい、いかがわしい行為に耽ってしまったことが悪いのです。どうか私を……)

澄み渡る青空の下、祥子はマリア像に懺悔する。一点の曇りも無い中、懺悔の内容はまるで対照だった。他の女生徒が簡単に祈りを捧げる中、祥子だけがずっと祈り続けていた。「紅薔薇さま、最近熱心にお祈りをしてらっしゃるわ」と言う声も耳に入らない。

祈りを終え、ゆつくりと目を開けると、そこには丁度祈りの対象となった祐巳の、心配そうに覗き込んでいる顔があった。

「嫌あああっ!!」

祥子は叫ぶと、祐巳を突き飛ばす。

「きゃっ!」

尻餅をついた祐巳は、何が起ったか分からない様子で祥

子を見上げる。

「ご、ごめんなさい……」

「い、いえ。大丈夫です」

そう言つて祐巳は立ち上がると、スカートに付いた泥を払った。

「どうされたんですか? お姉さま。何か悩みごとでも?」  
長時間マリア様に祈りを捧げていたので、何か悩みを抱えていると思われた様だ。

「私で良ければおっしゃってください。できるだけ力になりますから」

そんな事できる筈がない。今の悩みを知ってしまったら、きつと祐巳は祥子のことを軽蔑するだろう。

「まさか私のことじゃないですよ?」

どうして祐巳は、こういう時だけ気が付くのだろう? 時々祥子は、祐巳の勘が良いのか悪いのか分からなくなる。そして祥子は、凶星を突かれた時に、表情を崩さなかったか自信が持てなかった。

「なんでもないわ。祐巳には関係ないことよ」

「そうですか……」

この問題は、一見祐巳に関係していそうだが、実は関係無い。要は「祥子が祐巳をどう想うか」と言つ、祥子の内面の問題であつて、外面の祐巳がどうこうできるわけでは

ないのだ。

「それじゃあ、放課後薔薇の館で」

「はい……」

祥子と祐巳はそれぞれの教室に向かった。祥子の耳に、寂しげな妹の声が残った。

4

「危ない!!」

「きゃっ!」

ユーミは、スレーブの攻撃を辛うじてかわす。

「何ポーツとしてるんだ!」

「ごめん」

祥子さまの様子が最近おかしい。何か悩みを抱えていらっしやるように見える。それだけでも問題だけど、祐巳を避けているように見える。

今日の薔薇の館では、事務的な会話しかなかった。目を合わせようとしても、顔ごと背けてしまう。紅茶のお代わりを淹れる時も、身体が触れないように避けていた。何より、祐巳を見る時の表情が一番辛そうだ。

「はあ、はあ。やっと倒せた……」

「祐巳が集中しないからだ。ただでさえポーツとしてるん

だから、余計に集中しなきゃ駄目だろう」

「言うわね」

「事実だ。それとも死にたい?」

「分かったわよ」

とても反論できない。今日の大して強くないスレーブに手こずったのは、戦闘中に考え事してたのが原因だからだ。「あらあらあら、手こずってるって言うから、どんなに強いのかと思ってたら、大した事ないのね」

「誰!」

空から変な声がしたので、ユーミはその方向を見上げる。そこに一人の女性が浮かんでいた。腰まで伸ばしたストリートヘア。黒服に黒いマント、その隙間に見える白い生足が光って見える。顔立ちが整っていて大人びて見えるが、年はユーミとさほど変わらなそうだ。

「私はルージュ。あなたを倒すために来たの」

「なっ!」

ユーミは身構える。先ほどのスレーブとの戦闘で、ダメージが残っている。正直、少し不安だ。

「行くわよ」

「!」

ルージュが軽く腕を振ると、無数の光の矢が飛んできた。

「きゃああっ!」

光の矢は、ユーミの廻りに着弾する。閃光が炸裂し、泥と煙が舞う。その余りの速さに、ユーミは一步も動くことが出来なかった。わざと外したのか、ユーミ自体には着弾しなかったたので、むしろ動かなくて正解だったのかもかもしれない。

「遅いわね」

「うわっ！」

ユーミが目を開けると、眼前にルージユがいた。ほんの少しの間に、空中から移動してきたようだ。

「どうしてこんなのに手こずったのかしら…… あら？」

そう言つて、ルージユはユーミの顎を掴む。

「あなた、結構可愛い顔してるのね」

ユーミは身体を動かすことができない。ユーミは、黄薔薇さまに顎を掴まれた乃梨子ちゃんの気持ちがあつた様な気がした。

「ふぐっ……！」

次の瞬間、信じられないことが起つた。ルージユの唇と、ユーミの唇が重なりあつていた。ユーミは何が起つたのか、直ぐには理解できなかった。

（え？ な、何？ 嫌！）

状況を理解して逃げようとするが、既に腕を頭と背中に

回され、動けない。ルージユの舌が口の中に入ってきて、ユーミの舌を遊ぶ。最初は悪寒を感じていたが、段々と意識が飛んでいって、いつの間にかローズロッドも落ちていた。

「ユーミ！」

祐麒がルージユに飛びかかる。が、ルージユは片手で弾き返す。祐麒が地面にたたきつけられたところで、ようやくルージユはユーミの唇を解放した。

「気分が削がれたわ。続きはまた今度にしましょう」

ルージユが不敵に微笑む。

「美味しかったわ…… うふふ……」

ルージユが耳元で囁くと、ユーミの膝がゆっくりと曲がる。ユーミは放心したまま跪いた。

ルージユの身体が宙に浮かぶ。そのまま遠くに離れると、瞬間移動したのか姿が消えた。

ユーミの頬に、涙の道ができる。

「う、あ、うわわあん！」

ユーミは、顔を押さえて泣き出した。精神の緊張が切れたのか、変身も解除される。

「うぐっ、うぐっ……」

祐巳は唇を拭う。何度も何度も、強く強く。

「祐巳……」

祐麒が心配そうに声をかけるが、返事はない。



「取り敢えず、帰るぞ」

祐麒は、転移魔法で二人を福沢家に転送した。

祐巳は、自室に転送された。それから、ベッドに突っ伏して泣き続けた。

「祐巳、もう泣くなよ。あれは事故だったんだよ」

「ファーストキスだったんだよ。それが無理矢理、それも女性に…… 祐麒は男だからわかんないだろうけど」

祐巳は、ようやく口を開いた。

「ファーストキス……」

祐麒はそう呟くと、一旦部屋に戻り、子供の頃のアルバムを引っ張ってきた。

「ほら、祐巳見てみな。これは三歳の時の写真だけど、キスしてるじゃないか。あれはファーストキスじゃないよ」

「こんな子供の時の…… それに弟でしょ…… 祐麒は計算に入らないよ」

（女性は駄目で弟は良いのか？ よく分からん）

「それに女性同士だからって、祐巳は男同士でキスしてる

本たくさん持つてるじゃないか」

「そ、それだけ元気があれば大丈夫だ……」

祐麒は、折れた足を引きずりながら、自分の部屋へと戻って行った。

なお、祐巳の本当のファーストキスは、一歳の誕生日の時。父、祐一郎によるもののだが、それは父しか知らない事である。

## 5

翌日、お母さんが祐巳を起こしに来た。

「学校、行きたくない」

泣き続けた為に顔はぐちゅぐちゅ目は真っ赤。とても人前に出られる顔じゃない。お母さんは怒ったけど、熱も少しあったので、どうにか休むことができた。

夕方、玄関のチャイムを鳴らす音がする。普段はお母さんが出るんだけど、中々出ない。多分お夕飯の買い物に行ってるんだらう。仕方なく祐巳が玄関口に出る。

「はい、どちら様で…… あっ！」

「ごきげんよう、祐巳」

「お姉さまー！」

「今日休んだって聞いたものだから…… 具合はどう？」

「はい、おかげさまで。取り合えずお上がり下さい」

なんか日本語が変な気もするけど、気にしてはいられない。祐巳は、祥子さまを自分の部屋に通す。

「あ、ちよっと待っていてください。今部屋を片付けますから」

「そんな、気にしなくて良いのよ」

「そんな訳には……」

（私が気にするんです）

「病人が動いたら駄目ですよ」

「う……」

そう言っって押しきられ、祥子さまに部屋への侵入を許してしまふ。やっぱり、口では祥子さまに勝てない。

「ちゃんと片付いてるじゃない」

そう言っってくれるのはありがたいんですけど。

祐巳と祥子さまは、ベッドに腰掛けた。

「今日はどうして休んだの？ 風邪？」

「それが……」

祐巳は、一日休んで、さらに祥子さまに会った事で忘れ

ていた事を思い出した。段々と涙が溜まってくる。

「お、お姉さまあ……」

「何？ どうしたの？」

祐巳は、祥子さまにすがり付いて泣き出した。

「私、ファーストキスを奪われたんです。無理やり……」

「まあ、なんて事!!」

祐巳を抱きしめる腕が震え、力が入る。

「お姉さま、私……」

「安心して、祐巳。相手は誰？ 祐巳の唇を奪った男は、

私が懲らしめてあげるわ」

「いえ、復讐はいいんです。もう私のファーストキスが戻ってくるわけではないんですから。それに、奪ったのは男性ではなくて女性……」

「……」

祥子さまが固まった。

「祐巳、良く聞こえなかったんだけどもう一度言っってください？」

「ですから、私のファーストキスを奪ったのは男性じゃなくて女性だったんです」

「……そう」

「お姉さま？」

祥子さまが、じっと祐巳の唇を見つめている。

「とにかく、相手が男性であろうと女性であろうと関係無いわ。私が懲らしめてあげるから」

「あの、お姉さま。犯罪にだけは走らないでくださいね?」

「何を言ってるの。祐巳のためなら、私は修羅の道をも歩くわ」

祥子さまは両手で祐巳の顔を挟み、祐巳の眼前に顔を近づける。

「お、お姉さま。顔、近づき過ぎです」

「あら、ごめんなさい」

祥子さまは、慌てて顔を離す。

「それじゃあ、もうそろそろ私は帰るわね」

「ふう……」

祥子さまを玄関まで見送った後、トイレで一服。祥子さまは魔法だ。祥子さまに会ったら、一日中泣いてたのが嘘のように気分が晴れた。

「さて、いつまでどうじじじしててもしょうがない。頑張るか」

そう言っって晴れやかにトイレから出る。

「おめでとう、祐巳さん。吹っ切れたみたいね」

「うわっ!! 志摩子さんどこから!?!」

祐巳は心臓が止まるほど驚いた。誰もいない(祐麒はいるけど)筈の家に、志摩子さんが立っていたからだ。それもトイレの外に。

「そんなことはどうでも良いの。時間も無くなってきたし、もうそろそろユーミには本気を出してもらいたかったところなんだけど、大丈夫よね」

「な、何を志摩子さん。私はいつでも本気だったわ」

そう、本気でないと死んでしまう。

「いいえ、あれくらいじゃ足りないわ」

「そんな」

「それじゃ、もっと本気を出させてあげる」

そう言っって、志摩子さんは祐巳の耳に近づいて囁いた。

「祐巳さんのトイレの音、とても可愛いよね」

「な!?!」

そう言っって、志摩子さんは祐巳の耳にボイスレコーダーを近づけ、さっきまで祐巳が発していた音を流す。祐巳の顔が耳まで真っ赤になっていく。

「これ、聞いたがる人はいるかしら?」

「な・な・な・な!!」

祐巳はボイスレコーダーを取り上げようとするが、するりと躲かされてしまう。

「それじゃあ、祐巳さん。頑張っってね♡」

そう言い残すと、志摩子さんの姿が消えた。後には、項<sup>うな</sup>垂<sup>た</sup>れる祐巳が残った。

「し、志摩子さん……」

「志摩子さんも本気を出してきたか」

「祐麒……」

いつの間にか祐麒が隣にきている。

「やっぱり中の人と同じだけあって、トイレの音に……」

「それ、もういいから」

6

「志摩子さんが動いたか」

「福沢家近くの電柱頂上に人影あり。」

「志摩子さんが本気で動き出したなら、ルージユにも本気を出して貰わないといけないな」

乃梨子は、小笠原邸の方向に向けてジャンプする。しかし、着地すること無く姿が消えた。

「祐巳……」

部屋に帰って来た祥子は呟<sup>つぶや</sup>く。手に祐巳の頬の温<sup>ぬく</sup>もりが残っている。顔を近づけた時の、祐巳の息が自分に当たる

感触も。

「ファーストキス……」

誰だろう？ 祐巳のファーストキスを奪ったのは。

「許さない」

私の可愛い祐巳を無理やり手にかけるなんて。

「私を差し置いて……」

「誰!？」

祥子が振り返ると、乃梨子ちゃんが立っていた。

「祐巳さまのファーストキスは自分が奪う筈だったのに」  
そう思いましたね?」

「いいえ、祐巳を悲しませたことが許せないだけよ!」

「まあ良いでしょう。それならそれで」

乃梨子ちゃんはずかしく自分の心の奥底に入り込んで来る。言葉では否定したが、本当は乃梨子ちゃんが言っていることが真実だと思えてくる。いや、真実なのかもしれない。

「時に祥子さま。その祐巳さまの唇を奪った相手、どなたかご存じですか?」

「知ってるの!？」

「ええ。ユーミですよ」

「な!」

「彼女が祐巳さまの唇を奪ったのですよ」

「そう、あいつが……」

祥子の顔が段々険しくなってくる。拳にも力が入ってくる。

「それに、ユーミは祐巳さまの心を侵しています」

「どういうこと？」

「祐巳さまの精神は、ユーミのエネルギー源となっていて、このまま喰われ続けたら、祐巳さまの精神は消失してしまっしょう」

祥子の顔が青ざめる。

「これを防ぐには、ユーミを倒して祐巳さまを解放するしかありません」

俯きつつ、肩が静かに震わせる。

「そう、そうなのね。ユーミを倒せば祐巳は救われるのね

……」

祥子は毅然として顔を上げる。

「行きましよう！ ユーミを倒すのよー！」

祥子は、ルージユに変身すると部屋から転移した。残った乃梨子ちゃんが呟く。

「祐巳さまを解放できるというのは本当ね」

「私、最近寝不足」

魔法少女の活動は夜中が多い。スレープが夜行性なのかもしれないけど、お陰で睡眠不足になってしまった。今日は学校休んだので、昼間寝てたけど。

誰かに見られたり、授業を抜け出す必要が少ないのは助かっている。

「それは俺も一緒だよ」

「あんたは学校ないから昼寝すればいいじゃない」

「いつ人間に戻っても授業について行けるように、勉強してんだ」

「祐麒がそんなに真面目だとは思わなかった」

我が弟ながら関心。

「生徒会長が留年するわけにもいかないしね」

「でも出席日数はどうにもならないよ」

「……」

「ねえ、もつそろそろやばいんじゃない？」

「祐巳、さっさと決着をつけるぞ……」

「分かった……」

志摩子さんだけでなく、祐麒からもプレッシャーをかけ

られてしまった。

ユーミ達は近所の中学校の校門前に辿り着いた。

「ここにルージュがいる」

「ああ、威圧感が伝わってくる」

ユーミは校門を乗り越えて中に入る。近所とは言っても、幼稚園からリリアンに通っていた祐巳にとっつて、中に入るのは初めてだ。

「他人の学校に入るのって緊張するね」

「俺は慣れちまつたけどな」

「そりゃ毎日、それも女子高に通ってればね」

「何か狸になって、大事な物を失ってばかりな気がする」

「私も……」

ユーミが校庭の真ん中辺りまで進むと、校舎の上から声が聞こえてくる。

「ようこそユーミ」

「ルージュね、姿を見せなさい！」

声のした校舎の上を睨み付けると、屋上の床が妖しく光り、ルージュの姿が顕わになった。

「この間ありがとう。とても美味しかったわ」

「く！」

この、せつかく人が忘れていた事を。

「今日は、もっと美味しい所を頂こうと思っていたんだけど……」

変な想像をしまして、顔が火照る。横の夕又きはまた鼻血出してるし。

「だけど残念ね、あなたを倒すわ」

そう言った瞬間ルージュから魔法弾が放たれる。

「うわっ！」

ユーミは祐麒を連れて、辛うじて避ける。元いた地面が炸裂し、大きな穴が開く。直撃したら一発でやられる。

屋上からルージュの姿が消えた。次の刹那空中から魔法弾が連続して放たれる。闇夜に黒い服なので紛れてる様だ。

「うわわわ」

ユーミは必死に逃げ続ける。

(ユーミ、少しはフェイントを！)

(分かってる！)

ユーミは着弾の隙を狙って、今までと逆方向に飛ぶ。Gが逆方向にかかる。

「あれ？」

ユーミが逆方向に避けたにも関わらず、ルージュはさっきまでユーミが逃げようとしていた方向に数発魔法弾を放った。

（分かった）

（何が？）

（ルージユは魔法少女に成り立てだ。力とスピードはあるが、戦闘に慣れていない。フェイントについて来れないんだ！ 魔力の違いが、戦力の決定的な差でない事を教えてやるんだ!!）

「そう言う事なら！」

ユーミは動きを止めて身構える。

（それで何で動きを止めるんだ！）

「そこにいたの！」

ルージユは動きを止めたルージユを発見すると、一際大きな魔法弾を放った。

「てえいっ！」

それに答えてユーミも魔法弾を撃つ。ルージユの魔法弾にユーミの魔法弾が激突し、閃光を放つ。そこから、ユーミの魔法弾が八方に拡散し、ルージユの魔法弾を迂回してルージユに向かつていく。ルージユの魔法弾は、元々力の弱いユーミの魔法弾を裂きながらユーミに向かつていく。

「きゃああっ!!」

ルージユに魔法弾が着弾するのを見計らって、ユーミは魔法弾を避けた。空中と地上が同時に光り、爆風が吹き荒れる。

ルージユは不意を衝かれて魔法弾の直撃を食らったが、予め避ける事を想定していたユーミは、上手く避ける事ができた。

「上手い！ 良くやった、ユーミ」

「えへへ」

空中の爆煙が次第に晴れていく。そこに、鬼のような形相で睨むルージユがいた。

「この、よくも!!」

ルージユは今までよりも多くの魔法弾を放ってきた。しかし、散漫な攻撃は容易に避ける事が出来る。

ユーミも空中に飛んで空中戦になる。飛行軌跡の背後にあった校舎にルージユの魔法弾が当たり、教室が吹き飛ぶ。

「うわっ！ なんて事を」

「これじゃ直ぐに消防車とかが来て騒ぎになるね」

「早めに終わらせよう」

ユーミとルージユは、空中で魔法弾を打ち合う。互いに避けたり、防いだり。激しい攻防が続く。

「あう!!」

避けきれなかったルージユの魔法弾が、ユーミの足首を掠る。

「大丈夫か!？」

「へ、平気……」

掠っただけだというのに、もの凄いダメージだ。直撃をしたら命すら危ないかも知れない。

「ようやく止まってくれたわね。それじゃあ……」

ルージユが魔力を溜め始める。スピードが落ちたユーミを一気に仕留める気のようにだ。

「もうそろそろ…… 良いかな？ 行けっ！」

ルージユの周りに無数の発光体が現れる。

「何!? これは!」

発光体からルージユに向けて、一斉に魔法弾が放たれる。

「きゃあぁっ!!」

全天球三百六十度から攻撃を受けては、避ける事など不可能。ルージユはその全てを受けた。

「ふふ…… はは…… どう? 防ぎきったわよ……」

爆煙が晴れると、ボロボロになったルージユが姿を見せる。避ける事を断念し、全ての力を防御に回して防ぎきったようだ。

「……何これ?」

ルージユが、自分の視界が霞みがかっている事に気づく。

「拘束魔法陣展開」

十二の発光体がルージユを囲み、正二十面体を作ってルージユを囲んでいる。

「行けっ!」

発光体全てが一斉にルージユに向かって電撃を放つ。さっきまでの攻撃よりも至近距離からなので、威力が増している。

「こんな物!!」

ルージユが境界内から魔法弾を撃ち、破壊を試みる。発光体から放つユーミの電撃と、ルージユの魔法弾の反射で境界内の温度は急上昇する。

ユーミとルージユの魔法出力と忍耐力の根競べとなったが、魔力はルージユの方が上だった。拘束魔法陣の表面にヒビが入り始める。

「この!」

魔法陣の大きさが小さくなり、内部の密度が増す。しかし、ルージユがへたるより先に魔法陣が決壊した。閉じこめられていた電撃が辺りに放たれ、昼のように明るくなった。

「おほほほ! どうユーミ! こんな結果……」

勝ち誇るルージユ。しかし、煙が晴れて視界に現れたのは、ユーミの炎矛だった。

「あーっ!!」

ユーミの気合いと、ルージユの悲鳴が入り混じる。

「終わった……」

ユーミは肩で息をしている。校庭は穴だらけ、校舎も魔法弾などでボロボロ。明日絶対にニユースになる。

「意外とあっけなかったな」

「そう見える？ でももう戦えないよ……」

自分の魔力はもう残っていない。終始押していたように見えるが、普段以上の力を集中して出し続けていたため、活動時間は短くなっている。もう少しルージユが耐えていたら、一瞬で逆転しただろう。

辺りに立ち込めていた煙が次第に晴れていく中、ユーミは倒れているルージユの元へ、ゆっくりと歩み寄る。しかし、そこにルージユの姿はなかった。

「お姉さま!?!」

ボロボロの姿で横たわっていたのは、さつきまで戦っていたルージユではなく、祥子さまだった。

「そんな……」

今まで戦っていたのは、最愛の姉の祥子さまだった。シヨックで目の前が暗くなり、へなへなと腰を落とす。

「っ……」

祥子さまが意識を取り戻す。ゆっくりと身体を起こし、痛む傷を押さえながらユーミを見た。その時、集中力の切れたユーミの変身も解除される。そこには、当然祐巳の姿がある。

「祐巳……」

「お姉さま……」

二人は呆然と見つめ合う。

「あなたが……」

「お姉さまが……」

「ユーミだったの……」

「ルージユだったんですか……」

祥子さまがわなわなと震えて頭を抱える。

「そんな、私は祐巳の為だと…… 嫌あつ!!」

祥子さまが悲鳴を上げて仰け反ると、光に包まれる。その光が消えると、そこには祥子さまの姿はなかった。

「そんな…… お姉さまが…… お姉さまが消えちゃったよお……」

## 静かに魔法は消える

### 1

祥子さまは学校をお休みされた。学校では病欠という事になっているが、本当の理由を伝える筈もない。

「ねえ、祐麒。祥子さま居ると思う？」

小笠原邸の巨大な門を前にして、祐巳と祐麒は尻込みしていた。前に一度来ているけれど、庶民にとっては圧倒される。それにしても、初めて自分から祥子さまの家を訪ねた状況が、こんなだとは悲しい。

「祥子さんの事は、俺より祐巳の方が分かるだろ」

「そう、だよね」

妹なのに、祥子さまがルージユだと全然気づかなかった。祐巳はその事に改めて落ち込んだ。とにかく、ここでじっとしていても始まらない。祐巳は覚悟を決めて、門の横のブザーを鳴らす。

「どなた様でしょうか？」

インターホンから、女性の声がした。おそらくお手伝いさんだろう。

「私、リリアン女学園二年の福沢祐巳と言います。祥子さまはご在宅でしょうか？」

「……」

返事が返ってこない。門には監視カメラも付いていて、暫くこちらを眺めていたはずだ。門の前にはずつといた私達を不審に思っていたのかも知れない。それでも、妹の名前を出したら分かると思うけど。

『お嬢様は不在です』

「え？」

ようやく返ってきた返事は意外なものだった。

「今日祥子さまは、風邪でお休みされたと同つたのですが……」

庶民だと風邪を引いたら病院に行くものだけど、祥子さまの場合は往診に違いない。あ、庶民でも往診は別に珍しいか。

『とにかく、お嬢様は不在ですので』

そう言っつて、インターホンのスイッチが切られる音がした。

「怪しい」

「やっぱりそう思う？」

「取り敢えず、ここは移動しよう。でないとこっちが怪しくなる」

「そうだね。狸連れて訪れる人もいないだろうし」

「それを言っなよ」

そう言っつて、二人、いや 祐麒には怒られそうだが

一人と一匹はバス停のある方向に引き返した。塀に沿って移動しても、怪しまれるだけだから。

屋敷から見えなくなるくらいまで移動すると、会話を再開した。

「さて、どうする」

「中に入る。だって、祥子さまはいるもん」

「居留守を使ってるなら、入っても会えないんじゃないか？ それに見つかつたらやばい」

「祥子さまの部屋に直接行く。流石に部屋の中だと一人だろっし」

「でもどうやって入る？ 警備は厳重そうだ」

「こんな時の為に魔法があるんじゃない」

ユーミは、祥子さまの部屋のベランダに降り立つと、変身を解いた。

「やっぱり魔法少女になると見つからないね」

「見つかつたら危ない人だけだな」

祐麒にたんこぶを作ると、窓に寄った。窓は鍵が掛かっている。カーテンも厚く掛けられていて、中の様子は分からない。

「まず、中に入らないと」

どうせなら、鍵を開けてから変身を解けば良かったと後悔した。もう一度変身するのも面倒くさい。

「まかせな」

そう言っつて、祐麒は魔法で鍵を開けた。変身しなくても魔法が使えるのは便利そうだ。

「ねえ、祐麒」

「何？」

「あなた、こんな事をあちこちでやってないでしょうね？」

「失礼な。仮にも生徒会長である俺がそんな事するはず無いだろう」

「そっぴや、花寺学院って今生徒会長不在なんだよね。でも特に困ってるとか噂聞かないんだけど、なんで？」

「……」

祐麒の表情が強張る。

「あなた、やっぱり……」

「そんな事どうでも良いだろ。行くぞ」

「あ、祐麒はここで待ってて」

「え？」

「やっぱり、祐麒がいると祥子さまは警戒すると思うの」

「そりゃそうだろうけど、ここまで来て……」

「じゃ」

そう言っつて、祐巳は祐麒を縄で縛り、目隠しと耳栓もさせた。

(ちよつと待て！ 何もここまで……)

「よー！」

祐巳は祐麒の首を捻ると、落とすした。

「なんか、魔法とは関係ない技術を身につけてしまった」

祐巳は、何度も祐麒を気絶させていたために、今では簡単に落とせるようになっていた。

祐巳はそつと窓とカーテンを開け、祥子さまの部屋に入る。閉め切っている為に、昼だというのに真っ暗だ。段々と目が慣れてくると、ベッドのシーツが膨らんでいるのに気づいた。おそらく、ベッドに籠もっているのだろう。祐巳は、ゆっくりと近づいていった。

「お姉さま……」

祐巳はシーツの膨らみに触れると、祥子さまの耳元と思われる辺りに囁いた。膨らみが「ビクッ」と震えて、シー

ツが動く。

「祐巳……」

祥子さまがシーツから顔を出してくれた。が、また引っ込む。そんな、亀じゃないんだから。

「お姉さま！」

祐巳は、声を張り上げて祥子さまの身体を揺する。

「駄目よ！ 私は祐巳に顔を合わせる資格が無いわ！ だつて、私は祐巳を……」

「そんな！ それは私も同じです。むしろ私の方がお姉さまを酷い目に遭わせたんですから!!」

「それだけじゃないのよ!! 私は祐巳を……」

そこまで言っつて、祥子さまは口をつぐんだ。

「私を、何ですか？」

暫く沈黙が続いたが、ようやく祥子さまが口を開いた。

「祐巳、あなた私の事が好き？」

「ええ、もちろんです、お姉さま！」

「私も祐巳の事が好きよ。でも、私の『好き』と祐巳の『好き』とは違うわ」

「えと、どういうことだか分からないんですが？」

祥子さまはゆっくりと起きあがり、祐巳の手に自分の手を重ねた。

「祐巳、あなた『オナニー』つてした事ある？」

「へ!？」

え、えと、オナニーって、あのオナニーですか？ その、Hな本とかに載ってる。そりゃ、たまに雑誌にそう言う特集載ってる、読んだりするけど、まさか祥子さまの口からそんな言葉が出てくるなんて、イメージが全然信じられないんですけど。

「私はね、何度もしたのよ…… 祐巳を想って……」

祥子さまが伏し目がちで語る。祐巳は、ポカーンと口を開けて固まった。

えと、今なんて言いました？ 祐巳って私だよね。

「祐巳の姿、祐巳の声、祐巳の匂い…… そんな事を思い出しながら、祐巳と抱き合う事を考えてたの」

それは私を想像して、と言うか、私をそう言う対象として見ていたという事でしょうか。

「軽蔑するわよね。そう、私は姉失格だわ。妹を性欲の対象として見てしまったんだもの」

あの、性欲とか、ズバツと言われると余計に堪えるんですけど。

「祐巳、ロザリオ返して……」

「えっ!？」

「いえ、棄ててちょうだい。こんな私から受け取ったロザリオなんて嫌でしょう?」

祐巳は、ごくりと唾を飲み込むと、祥子さまの手を強く握り、一気に捲し立てた。

「そんな事ありません！ 私だって、いつもお姉さまとくっついていたいと思ってるエロエロ妖怪やねん！ 私、お姉さまの為ならば一夜を共にします!!」

こんどは、祥子さまが呆けた。そして、くすくすと笑い始めた。

「ありがとう、祐巳。こんな私を嫌いにならないでくれて、そう言うって、祥子さまは祐巳に抱きついた。

「そんな、私はお姉さまの事が大好きなんですから」

「祥子さまは、ちらつと舌を出して、祐巳の首筋を突いた。」「ひいっ!!」

不意打ちを食らって、祐巳の身体がビクンと撥ねる。

「本当に私の事好き?」

「本当ですとも」

「悪戯っぽく問う祥子さまに、祐巳は引きつりながら返答した。」

「でも、さっき『一夜を共にします』って言ったわよね」

「そうですけど」

「それだとやっぱり私と離れたいのね」

「いえ！ そんな事は！ あれは言葉の綾というか……」

「冗談よ」

「はは……」

「さて、仲直りした所で……」

突然第三者の声があったのに驚いて、祐巳と祥子はその声の方向を見る。そこには乃梨子ちゃんが立っていた。

「乃梨子ちゃん!? どうして? いつからそこに?」

祐巳は思わず叫んだ。祥子さまは目を伏せている。もしゃ?

「お察しの通り、祥子さまを使役しえきしていたのは私です」

「本当ですか? お姉さま」

「そうよ。私は、乃梨子ちゃんの指示で祐巳を攻撃していたの」

「そんな、どうして?」

「それは、乃梨子ちゃんに弱みを握られてたから……でも、もうそれは無いわ。私が乃梨子ちゃんに従う理由が!」

祥子さまは、乃梨子に向き合った。

「弱み? 契約内容をお忘れですか? 何だったら、今ここで復唱して差し上げますが」

祥子さまの顔が青ざめる。祐巳への告白で舞い上がったいた祥子さまは、本当の契約内容を一時的に忘れていた。

「それより、どうして? 私を攻撃するって事は、志摩子

さんを邪魔する事になるんだよ」

祥子さまは驚いて祐巳を見たが、乃梨子ちゃんは動じなかった。

「だからです」

「そんな、志摩子さんは乃梨子ちゃんのお姉さまなのにとっして?」

「姉の愚行ぐこうは、妹の私が止めなくてはいけません。祐巳さま、そして祐麒さんも志摩子さんの犠牲者でしょう?」

「そりゃ、志摩子さんの所為ひとで非道い目に遭ってるけど、それはアンゴルモアの大王が地球を破壊するのを防ぐ為だった」

「アンゴルモアの大王? 随分懐かしいわね」

祥子さまの思考も祐巳と同じようだ。乃梨子ちゃんは、無視して話を続ける。

「そのアンゴルモアと言うのは志摩子さんの事です」

「え?」

「銀杏を集められなかったら、自分が地球を破壊するつもりなのです」

「え〜と、そしたら志摩子さんも死んじゃうんじゃない?」

「大丈夫です。私の姉は宇宙人ですから」

「え〜と?」

「正確に言つと、お父様が宇宙人でお母様が地球人なので

「ハーフです」

「え〜〜〜と？」

「突っ込んではいけません。負けです」

「結局そうなるのね」

祐巳は一気に脱力した。でも志摩子さんや、あのお父さんが宇宙人だと言われると、なんか納得できるものがある。「と言う訳で、志摩子さんを倒せば地球も破壊されずに済むし、祐麒さんも元に戻って万事解決です」

「分かった。なんか騙だまされてる気がするけど」

「さあ、みんなで小寓寺しよゆうじに行きましょう。祥子さまも」

「私も？」

「でないと契約内容を祐巳さまにばらしますよ」

祥子さまは、今度こそ本当に乃梨子ちゃんに弱みを握られた様だった。

「勇いさんで行く割にバスなのね」

祐巳、祥子さま、乃梨子ちゃんの三人は小寓寺循環のバスに乗っている。事件の全ての黒幕に最終魔法決戦を挑いどもつという時に、なんかイメージが違う。

「魔力の温存になるじゃないですか」

「そりゃ、疲れないけどね」

そんな会話の間も、祥子さまは窓の外を見ている。車酔いしやすい祥子さまにとって、バスは天敵だ。

「きゃああ〜っ!!」

「どうしたんですか!? お姉さま?」

祥子さまが大きな悲鳴を上げて気絶した。祥子さまが見ていた窓を見ると、べったりとタヌキが張り付いている。

(祐巳、落とした上に置き去りかよ!)

「ちよつと、なんて事すんのよ! 祥子さま気絶しちゃったじゃない!」

(少しは弟の心配もしろよ!)

「はあ……」

乃梨子ちゃんは、醜い姉弟喧嘩げんかを見てため息をついた。志摩子さんを倒せば、この争いも無くなるのだろうか?

2

バス停から降りて、小寓寺に向かって歩く。その途中に和服の少女が立っていた。黒地に朝顔の模様の着物を着ている。

「皆さんお揃そろいで。今日はこういったご用件ですか?」

志摩子さんが、無垢むくな笑顔でにっこりと微笑ほほえみかける。

「志摩子さん、もうこんな事は止めてください」

「……それはできない相談ね。銀杏の種の蒐集は止める訳にはいかないわ」

「そのために祐巳さまや祐麒さんを犠牲にしても良いんですか？」

「あなたにそんな事が言えて？ 祥子さまを犠牲にしておいて」

やっぱり姉妹だ。祐巳達は内心考えていた。

「ごちゃごちゃと五月蠅いわね。要は志摩子を倒せば良いんでしよう？ 祐巳！」

「あ、はい」

祥子さまが、志摩子さんと乃梨子ちゃんの間答を無視して変身する。祐巳もそれに倣って変身した。一瞬見えた祥子さまのシルエットはとても美しかった。

「あら、血気盛んですね。じゃあ、瞳子ちゃん出てきて「え!？」」

志摩子さんの後ろから、ふらりと瞳子ちゃんが現れた。彼女の目はどことなく虚ろだ。

「瞳子ちゃん、どうして？」

「ユーミ、この間の恨み、晴らさせて頂くわー！」

瞳子ちゃんは、祐巳とユーミが同一人物だと言う事を知らない。だからユーミには恨みしか残っていないんだ。さ

らに瞳子ちゃんの恥ずかしい過去を暴露して、精神攻撃として使い、洗脳したに違いない。

「言葉による戦闘を宣言します！」

「へ?？」

「大地は二つに裂け、マグニチュード九・九で鳴動する!」瞳子ちゃんの足下から、ユーミ達に向かって地割れが起きる。

「何なの？ この攻撃は？」

「戦闘機か。流石中の人の役が多彩だと色々できるな」

「またそうなのね……」

「呆れてないで反撃だ！」

「でも瞳子ちゃん、こないだ退院したばかりなのに」

「病院送りにした張本人が何を言うんだ」

うつ、痛い所を突いてくる。

「まあ、いい。志摩子さんとの戦いに魔力を残しておかなくちゃいけないから、今度は俺が戦おう」

「祐麒が？ 大丈夫？」

「この身体だと、アクシオンは無理だけど、言葉による戦闘ならどうにかなる。それに相手は病み上がりだ」

瞳子ちゃんごめん。

祐麒は、瞳子ちゃんに向き合った。

「可愛い蝶よ。ピンに貫かれ、標本となれ！」

うわっ、痛そう。想像しただけで全身痛くなりそうだ。

祐麒が叫ぶと、瞳子ちゃんではなく、ユーミに無数の針が突き刺さる。

「きゃああっ!!」

「そんな、どうして!? そうか、瞳子ちゃんのサクリファイスは『ゆみ』だった!」

「そ、それ、捻り過ぎだよ……」

痛そうだけでなく、本当に激痛が走って、ユーミは顔をゆがめる。

祐麒は、瞳子ちゃんに対する攻撃を決めかねている。攻撃してダメージを受けるのはユーミだからだ。

「さ、瞳子ちゃん。今なら一気に行けるわ」

「はい、志摩子さま」

志摩子さんが瞳子ちゃんに囁く。

「負けたら祐巳さんと離ればなれ、もう一生逢えないわ」

「分かっています」

悪魔だ。志摩子さんは白い悪魔だ。今の服は黒いけど。

「さあ、行くわよ!」

瞳子ちゃんが構えた所で、祐麒が叫ぶ。

「ユーミ、変身解除!」

「え!? わ、分かった」

ユーミは変身を解いて祐巳に戻る。結局変身しても何も

してなかった。

「ああっ! 祐巳さまっ! 私、また祐巳さまを非道い目に!」

瞳子ちゃんの目が元に戻る。どうやら洗脳が解けたようだ。と同時に、祐巳を再び攻撃したことでショックを受けていた。無理もない。

「ごめんなさい、祐巳さま! 私、私……」

「瞳子ちゃん、あのね、私を攻撃する様に仕向けていたのは志摩子さんの」

「志摩子さまが……」

そう言っ、瞳子ちゃんは志摩子さんの方を振り向く。

「だから、私に謝るなら志摩子さんを攻撃して!」

「そうですか…… 分かりました!!」

瞳子ちゃんは志摩子さんを睨み付けた。

(上手いな)

(言わないで)

祐麒が褒めるが、こんな事褒められても嬉しくない。

瞳子ちゃんの髪と瞳が緋色に染まる。縦ロールが解け、ストリートになった。まさに炎髪灼眼。

「祐巳、おまえはあたしが護るから」

「呼び捨て?」

「突っ込むのそこかよ!」

普段とは逆に、祐麒が突っ込んだ。

「ねえ、祐巳。あなた達は何を言っているの?」

ルージユが疑問を投げかける。このやりとりの意味が全く分からない様だ。当然か。

「お願いだから訊かないでください」

「……そう」

ルージユに教えるという事は、祥子さまに教えるという事。祥子さまには知られたくない。

その間に、動いたのは瞳子ちゃんだった。

「行くわよ!」

そう叫んで瞳子ちゃんが志摩子さんに向かって疾走する。

「んぶべっ!!」

志摩子さんが腕を払うと、瞳子ちゃんは近づくと事もできず、凄まじい勢いで逆に吹き飛ばされ、蛙を踏みつぶした様な悲鳴を上げた。

「この…!?!」

瞳子ちゃんはずぶとく起きあがるが、顔色を変えると、お腹を押さえて座り込んだ。

「ぶぐっ!? な、何を…」

「魔法少女って、最初に相手を下痢にするんでしょう?」

「ああっ…!」「非道い…」

瞳子ちゃんは苦痛で顔を歪め、真っ青になって震えている。

る。脂汗が顔だけでなく、首筋にも、足にも流れている。とても耐えきれないのか、時々悲鳴にも似た呻きをあげている。お腹の音がこっちまで聞こえてきそうだ。

祐巳は祐麒の師匠が志摩子さんだったのを思い出した。祐麒が言っていたのはこの事だったんだ。志摩子さんは瞳子ちゃんが苦しむ様を見て、楽しんでるようだ。あの魔法少女は親友を苦しめて、反省してたというのに。

「粗相はしないようにね。それで、お次はどなた?」

志摩子さんは瞳子ちゃんに声をかけると、こちらに振り向いた。顔がにこにこ笑っている。瞳子ちゃんを苦しめて、何の後ろめたさも感じて無いようだ。

瞳子ちゃんが退場したので、祐巳は再び変身する。瞳子ちゃんの仇を取るべく、志摩子さんに向けてローズロッドを構え、魔力を集中させる。

「行くよ、志摩子さん!」

何も起こらない。

「あれ?」

いざ魔法弾を撃とうとした所で、ローズロッドに溜まっていた魔力が消失した。こんな事は初めてだ。

「ユーミ、あなたが魔法少女になれたのは誰のおかげ?」

「あっ!?!」

そうだった。祐巳がユーミに変身できるのは、志摩子さんの魔力の供給を受けているから。志摩子さんが魔力の供給を止めてしまえば魔法を使う事はできない。

「そう、気づいたようね。ユーミの魔力は私の物。そして変身できるのも、私が魔力を与えている為。だから魔力の供給を止めれば……」

志摩子さんが右手を挙げる。

「あなたいつペン、脱いでみる？」

「えっ!? ちょっと待っ……」

志摩子さんが指を鳴らす。本当はそんな事も必要ないんだろうけど、気分には違いない。そして志摩子さんの魔力で構築されたユーミの服が分解し、変身が解除された。

「きゃああああっ!!」

分解されたユーミの服は、元の服に再構築されるための魔力を供給されず、そのまま消失した。つまり、祐巳は全裸の状態にさせられてしまった。祐巳は胸を隠しながら座り込む。

「し、志摩子さん、せめて服を……」

「女性の動きを封じるにはこれが一番ね」

「お、鬼……」

「でも、ここに男子は祐麒さんだけ。彼は祐巳さんの弟で、しかも、もう全てを見せたじゃない」

「そう言う問題じゃない!」

いくら弟は言え、既に全部を見られたとはいえ、恥ずかしいものは恥ずかしい。それにいくら他に誰もいないとはいえ、屋外で素っ裸なんて耐えられない。

祐巳が動けないでいると、ルージュが近づいてきて、自分のマントを掛けた。

「ル、ルージュ?」

「祐巳、あなたはここで待ってて。私の魔力は乃梨子からの物。志摩子が消す事はできないわ」

「あ」

「安心して。私にかかれば、志摩子さんなんて雑魚同然よ」

そう言っつて、ルージュは前に進み出た。

「雑魚?」

志摩子さんのこめかみがピクリと動く。

「せいっ!!」

ルージュがいきなり大出力の魔法弾を放つ。不意を突いた筈だったが、志摩子さんは片手で防御魔法陣を展開、難なく受け止める。

閃光が消えるのを待たず、ルージュは移動しながら空中にいくつもの発光体を放つ。そこから一斉に志摩子さんに向けて電撃を放った。

流星は元が祥子さま、一度ユーミと対戦しただけなのに、

もう戦い方が進化している。ルージユが不幸だったのは経験が積み重なった事で、もし乃梨子ちゃんが焦らずに経験を積ませていたら、ユーミは勝てなかっただろう。

「雑魚って言いましたね」

志摩子さんが電撃を難なく避けながら、懐から銀杏の種を取り出した。今までユーミが集め、志摩子さんに送った銀杏の種だ。その銀杏の種が割れると、志摩子さんの瞳の色が変わる。移動速度も今までの数倍になる。服も着物から、ミニスカートのワンピース風の甲冑姿になった。手には戦車の主砲の様な物を持っている。

皆が魔砲少女への変身を驚いている間、志摩子さんは発光体に向け素早く方向転換をしながら、全ての発光体を瞬時に粉碎した。

「直撃よ！」

「な!？」

人間離れた（宇宙人だけ）、あまりの早業に、ルージユが驚きのあまり息を呑み、動きが止まる。志摩子さんを見失ったルージユが辺りを見回していると、ルージユの頭や肩にパラパラと小さい物体が落ちてきた。

「何、これ？ ビーズ？」

「ビーズ？ 志摩子さんがルージユの頭上からビーズ？ あっ！」

「お姉さま、逃げて！」

ユーミは、思わず「ルージユ」ではなく「お姉さま」と叫んでしまった。だが、逃げるまもなく志摩子さんも叫ぶ。

「ビーズを爆弾に変える能力!!」

ルージユにはらまかれていたビーズが一斉に爆発する。爆発音にかき消され、悲鳴も聞こえない。

「お姉さまあ!!」

爆煙の中から、気絶したルージユが落ちてきた。

「トドメ!!」

落下地点に向けて、志摩子さんはさらに魔砲を撃ち込む。目が見えなくなるくらいに閃光が辺りを包む。

「嫌あああ!!」

爆煙が未だ残る中、祐巳は急いで爆心地に向かう。激しい爆発で地面がえぐれている。さらに辺りは焼け付くように暑い。

「うう……」

祐巳はルージユを抱き抱えるが、ボロボロで意識もない。

「そんな、お姉さまはもう動けなかったのに……」

「私を雑魚と罵った酬いです。せめてもの慈悲として、二人一緒に地獄に流してあげましょう」

志摩子さんが祐巳とルージユの方に腕を伸ばした。こちらに向けた掌が光り出す。そして目の前が真っ白になり、

もう駄目だと思った瞬間、中心に黒い影が現れた。

「ぐああああっ!!」

「祐麒!？」

志摩子さんの魔法弾を、祐麒が盾になって防いでくれていた。

「そんな!？」

「早く… 逃げろ… 祐巳。俺には… これ位しかで

きないから……」

祐麒の毛がちりちりと焦げていく。裂傷も起き始めたの

か、祐巳の頬に血が数滴飛んでくる。

「祐麒いつ!!」

祐巳は叫ぶ。実の姉なのに、弟を盾にするなんて。今までさんざん半殺しにしてきて何だけど、他人にやられるのは別だ。

祐巳の身体から光りが溢れ、球状に広がる。その球の半径が、祐巳と祐麒との距離よりも大きくなる。その球の内側は、平穏な空気に包まれた。志摩子さんの魔法弾が球の表面で止まって、二人に到達しない。

「何? どうしたの?」

「うう……」

「祐麒! あれっ!？」

祐麒の身体から、毛が無くなり、腕と足が伸び、次第に

人間の姿に戻っていった。

「なっ!？」

志摩子さんも驚いて攻撃を止める。祐巳は祐麒に近寄り、抱きしめた。

「祐麒、人間に戻ったんだ…… よかった…… でも、どうして?」

「ううん、姉弟裸で抱き合うとは、凄い光景ね」

「!?」

祐巳が声のした方向に振り向くと、茂みの陰に隠れて、

カメラを構えている薫子さんがいた。

「な、な、な、何で薫子さんがここに?」

「あちやく、とうとう見つかったか。何ヶ月か前から、近所で魔法が使われてるのに気づいてね。そしたら祐巳さん達が凄い事やってるんだもの」

「じゃ、じゃあ、ずっと見てたの?」

「そ、ばつちり写真に納めたから、後で見せてあげるわね」  
(……後でフィルム焼こう)

なんか脱力した。やっぱり薫子さんには敵わない。

「いや、それにしても祐巳さんの魔法無効化能力にはびっくりしたわ。やっぱり、パイパンだと魔法を無効化できるのね。それに威力も凄い。まさか、祐麒さんにかげられた魔法まで無効化するなんて」

「……」

祐巳の顔が、この上なく真っ赤になる。ただでさえ生えてなくて恥ずかしいのに、言いふらされるなんて。褒められても全然嬉しくない。でも、どうして薫子さんが知ってるのだろうか？

「じゃ、私はまた隠れて見てるから、良い絵を期待してるわよ。あ、のどかさんも頑張ってるね」

そう言っつて、志摩子さんにも手を振ると、薫子さんはまた茂みに消えた。

『のどかさん』って誰だよ。この場において、意識がある全員が突っ込んだ。

さて、これからどうしよう？ 志摩子さんの攻撃はもう通じない。でもそれだけじゃどうしようもない。それに、裸の私は動けない。

「そんな祐巳さまに良い物があります」

「うわっ！ びっくりした」

不意に乃梨子ちゃんに声をかけられ、祐巳は心臓が止まるかと思っくらい驚いた。

「これを」

「何？ これ」

乃梨子ちゃんから手渡されたのは、ハードカバーの一冊の本。表紙には、十字の形をした飾りが付いている。

「夜天の書です」

「……」

「我が主祐巳よ、どうぞ変身を」

……そう来ると思った。

「私の杖と甲冑を。夜天の光よ、我が手に集え！ 祝福の風、リインフォース。セットアップ！」

そう叫ぶと、祐巳の回りに服が現れる。以前とは別のデザイン。黒と白のコントラストの効いた服、スカート丈が短いのがちょっとセクシー。

「行くよ、志摩子さん」

ユーミは、ゆっくりと志摩子さんに向かって歩いていく。志摩子さんが魔法弾を連続で浴びせる。しかし、魔法弾は全てユーミの直前で消滅した。ユーミは反撃しないで、ただゆっくりと近づいていく。その様子は逆に恐ろしい。

「いや、来ないで」

志摩子さんの表情が引きつってくる。魔法弾の威力と速度を上げるが、ユーミは意に介さない。

「ひっ！」

攻撃が無駄だと悟り、さらにある予感を感じた志摩子さんはこの場を逃げだそうと後ろを向いた。その瞬間、ユー

ミは志摩子さんに飛び寄り、後ろから抱きしめた。

「嫌ああ!! 助けて! 消える! 消えちゃう!! お願  
い! 放して!!」

志摩子さんの魔力がどんどん無効化され、急激に減少して行く。志摩子さんもそれを感じ取り、顔は恐怖で青ざめ、ユーミを振り解こうと必死に暴れている。しかし、ユーミは腕を回してしっかりと抱きしめている為に、振り解く事ができない。それに、魔力の減少と共に腕力も少しずつ減少していつてるのでなおさらだ。

魔力が完全に無くなると、志摩子さんは抵抗を止めて動かなくなり、がっくりと膝を落とした。顔面蒼白になり、震えている。涙が頬を伝わり、前に回しているユーミの手にもぼたぼたと落ちた。

「完全に消えた…… そんな、私もう、魔女じゃないの  
ね……」

「ふう…… 終わった」

志摩子さんの魔力が完全に消えた事を確認すると、ユーミはようやく志摩子さんを放し、変身を解いた。すると、志摩子さんが振り返り、祐巳に縋り付いて叫んだ。

「どうしてくれるの!? あなた達は元はただの人間だけど、  
私は違うのよ! 魔女じゃなくなってしまうたら、私どう  
したら……」

志摩子さんの魔力は、魔法を一時的に使えなくなったの

ではなく、もう永久に使えなくなる位まで無効化されてしまったようだ。しかもユーミのように後から魔法少女にさせられたのではなく、生まれた時からの魔女。魔力の喪失は、そのアイデンティティに関わる問題のようだ。

そう思うと、少し可哀想に思えてきた。少しやり過ぎたのかも知れない。

「いい加減になさい! 他人の人生を滅茶苦茶にしておい  
て! あなたはそれだけの事をしたのよ!」

祥子さまがボロボロの身体を引きずりながら、志摩子さんを一喝した。

「見なさい! 祐麒さんなんて、あなたが狸にしたのよ。  
祐巳が戻さなかったらどうなっていたか……」

皆が一斉に祐麒の方に振り向いた。全裸のままだった祐麒は、慌てて自分の大事な所を隠した。良いシーンの筈なのに、気まずい空気が漂う。

「……とにかく、あなたは罪を償わなければならないわ」  
志摩子さんはしゅんとなって俯いている。流星に反省しているようだ。

「大丈夫、ちゃんと謝れば、みんな許してくれるよ」

「祐巳さん、ありがとう。一番迷惑かけたのに……」

「気にしてないから。私達親友でしょ。これからがんばろう、

でないとNASAに売っちゃうよ」

今度は、祐巳が志摩子さんの弱みを握ったようだ。宇宙人のサンプルなんて、NASAやペンタゴンが喜ぶはず。

「……祐巳さん、やっぱり許してないのね」

「まさかあ。ははは。でも、これで一件落着。志摩子さんの魔力が消えたのなら、地球が破壊される事もなくなったし」

「あ、それはまだ」

「へ？」

えと、まだ何か？ 時限装置でも仕掛けてあるの？

「お父様がいるわ」

「えと、どういう？」

「この星の破壊は、一族の悲願なの。私がやらなくても父がやるわ」

「……」

「祐巳さん、頑張つて。罪滅ぼしに、私がサポートするか」

「あは、は、は……」

魔法少女ユーミの戦いはまだまだ続く……

## あとがき

続きません。

皆さんごきげんよう。PARALLEL ACT 主催者 TomOne  
です。

ようやく完成版になりました。いつまでも暫定版ばかり  
で申し訳ありませんでした。今までのものに本文加筆修正、  
そしてようやく表紙と挿絵が付いています。

挿絵のスケジュールも凄かったです。表紙が出来たのが  
二週間前くらい。その時は挿絵はまだ。悪いことに、先週  
くらいに絵描きさんが（国内）出張に旅立ちました。そし  
て出張先のホテルで下絵。200dpiのハンディスキャナで下  
絵を取り込み、メールやサイト経由で下絵のチェック。こ  
れが火曜くらいでした。そしてペン入れ完成が水曜深夜。  
そのコピーを宅急便で送って貰い、金曜夜に届きました。

それをフラットベッドスキャナで 600dpi でスキャン。ゴ  
ミ取りと、ラインの掠れを修正、サイト経由で絵描きに送  
ります。色塗りが完成したのが土曜の午前でした。

元のデータは PSD なので、EPS に変換。L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X に取り込  
みます。サイズやレイアウト調整、製本印刷は四ページ毎  
なので、ダミーの空白挿入等の作業です。本文をもっと増  
やせと言う突っ込みは無しで…… とにかく、ギリギリ間  
に合いました。これでトナーが切れなければ(笑)

ちなみに絵描きさんはまだ帰ってこれる見込みは立って  
ません…… 南無。

当初の完成から遅れたので、とうとう中の人が変わる魔法  
少女役をやってしまいました。流石に祐巳を車椅子にはし  
なかつたですが、役名錯乱病（古い）ネタはしっかり使わ  
せて貰いました。って言うか、四月は大阪に行く予定です  
(笑) 新刊持って(爆)

と、言うわけで、四月の新刊はなのは A<sub>s</sub> 本の予定です。  
プロットは大分固まったので、もうそろそろ文章を書き始  
めます。今度は絵描きに頼めないなので、自分で下手な絵を  
付けるつもりです。彼は「姫ちゃんのリボン」の新刊があ  
るし。

四月には他にマリみてオンリーやサンクリもありますが、  
そこで新刊は無理です。流石に……

その後、夏コミではなのはの感想本とエロ小説を出す予定です。つうか夏コミ男性向けなのはで申し込んだし(爆)  
別にマリみて熱が下がったわけではないので、マリみての本  
は出し続ける予定です。ひよつとしたら「かしまし」も……  
おっと、その前に電脳天使の本も書かないといけない！

’06年3月18日





---

## TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』の同人誌を発表する。

---

## お姉さまは魔法少女

PARALLEL ACT SERIES

---

2005年12月30日 第1版発行

定価はカバーに表示してありません

2006年2月12日 第2版発行

2006年3月19日 第3版発行

著者 TomOne  
発行者 村上智一  
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://kikyou.sakura.ne.jp/~tomone/>

E-Mail [tomone@kikyou.sakura.ne.jp](mailto:tomone@kikyou.sakura.ne.jp)

---

印刷機 あなたのプリンタ

---

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。

送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。



